

『東洋客遊略』の音訳漢字表記について

高山, 倫明
島根大学講師

<https://doi.org/10.15017/10434>

出版情報 : 文献探究. 19, pp.1-12, 1987-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

『東洋客遊略』の音訳漢字表記について

高山 倫明

一

清代に成った日本の文化・歴史の研究書『吾妻鏡補』(一)『日本国志』三十卷(翁広平撰、嘉慶一九〇一年序)は、その中に、日本語を音訳漢字で書き記した中日対訳語彙集二巻を含んでおり、いわゆる中国資料の一つとして、すでに国語史の研究に利用されている。^(二)
「国語解」と題されたこの語彙集は、巻二十七・二十八の両巻に収められているが、その構成は次のようになっている。

○巻二十七

冒頭に「国語解」^(三)と記して、天文時令類以下七つの類に意義分類した計四七九項目の対訳を示す(傍線筆者、以下同じ)。

○巻二十八

まず冒頭に「国語解二」と記して、衣服類以下七つの類に意義分類した計五七九項目の対訳を示し、ついで「州名島名類」^(四)「国語解本日本図纂参海防類考」と記して山城・大和といった州名島名の類八一項目、さらに「長崎町名」^(五)「本東洋客遊略」として長崎市街の町名八四項目の対訳を列挙している。衣服類以下の七類は内容的にみて前巻の続きであり、そこまでは「本海外奇談」である。

両巻の言語量に開きがあるが、「州名島名類」の下の「国語解」の文字は後からの補入(同筆)であり、巻首の凡例第十四則に、

一 遼金両史俱有国語解茲仿其例作国語解三卷

とあるところを見ると、ここから先は本来「国語解三」として独立

した巻だったのかもしれない。

「国語解」の日本語は、その出典が明示されているように、全て他書からの引用で、撰者自らの集録にかかるものではない。これら相異なった典拠をもつものを、『吾妻鏡補』の名のもとに一括して取り扱い、その成立時(一八一四年)をもって十九世紀の言語資料、撰者翁広平の出身地(江蘇省呉江平望)をもって音訳漢字の原音を呉方言、と見做すむきもあるが、典拠を異にするものはやはり別個に扱うべきであろう。「州名島名類」などは十六世紀半ばに成った『日本図纂』(明・鄭若曾撰)の表記をほぼそのまま踏襲したものであって近世語の資料としては扱えないし、また、原著者の方言音と撰者のそれとが必ずしも同一であるとは限るまい。

撰者未詳の『海外奇談』なる書物から引く日常語彙、合計一四類一〇五八項目が「国語解」の大半を占めるわけであるが、これは別稿で触れることにし、ここでは、末尾に付載された形の、『東洋客遊略』に拠る長崎町名の表記について見てみようと思う。

二

『東洋客遊略』という書物の詳細について、筆者は今のところほとんど何も知り得ていない。『吾妻鏡補』巻首の引用書目に、

東洋客遊略 張禹若

とあって著者名は知られるのだが、内外の資料に未だその名を見出

していない。

『吾妻鏡補』巻首の凡例第十則には、

一前朝與日本通商無定例亦無定處 国朝康熙中其國中御門天皇

正徳五年定於長崎交易東洋客遊略有通商條規録為一卷蓋日本

之原文也

とあり、同書巻十七に「通商條規 本東洋客遊略」と記して正徳新令に關連する諸條規が引かれているので、本書『東洋客遊略』、以下同じ)の成立は少なくとも正徳五^{一七二七}年よりは後である。同巻には通商條規に続いて、

東洋古倭奴國今名日本商人諱言之故曰東洋長崎其港名也諸舶

泊此彼國梵書不可通曉唐商至却以中華文字示之正徳五年我

大清聖祖五十八年也

當作五十四年

とあつて、書名の「東洋」の意がここに知られるが、康熙帝の廟号「聖祖」があるところを見ると、成立の上限はもうすこしばかり下るのかもしれない(康熙帝は一七二二年没。末尾の割注は翁広平のものであろう)。「吾妻鏡補」の成立が一八一四年、自序によれば完成までに七年の歳月を要したというから、本書は十八世紀前期から十九世紀初期までの間に成つたといふことができよう。その他の内部徴証からさらに年代を絞り込むことも、あるいは可能かも知れないが、後考に俟ちたい。通商條規を録し、長崎全町の発音を書き留めた本書は、おそらくは貿易現場での見聞にもとづいた日本紹介の書であつたかと想像されるが、言語資料としては、とりあえず十八世紀のものと考えておくのが(十九世紀のそれとするよりは)無難であらうか。

本書には、大友信一・木村晟の両氏に校本があり、すでに解説が試みられている。この研究成果を踏まえながら、本文を次に掲げることにする。便宜のために通し番号を付し、誤字と思われるものは

【一】内に、脱字と思われるものは()内にそれぞれ補訂を試みた。音訳漢字の横の片仮名は校本による解説、下の平仮名は筆者の試読である。

本書の音訳漢字表記は、字種に整理統一の跡がなく、同一音節の異字表記、異音節の同字表記といった不規則かつ恣意的な用字法が散見して、少なくとも日本語の音韻体系に則したものはなっていない。おそらくは、中国語を母語とする人間が、自己の音韻の枠組で日本語の音声を捉え、しかるべき漢字を宛てていったものである。長音や撥音などの不完全音節に独立した字母を宛てず、シラブル単位の音注になつているのも、それと無関係ではあるまい。

一般に、外国資料は国語史の音的側面の研究に対して特異の価値を有すると言へるが、その活用にあたっては、外国文字の書記法と日本語の音節の対応関係が正確に把握される必要があるのは言うまでもない。しかし、キリシタン資料のように整然とした表記体系を有するものもかくとして、本書のような、いわば雑然とした表記形態をとるものの場合、その対応関係を導き出すのは思ひのほか容易ではない。個々の音訳漢字の音価をあれこれ想定し、それらを単純に繋ぎ合わせてみたところで、必ずしも正確な日本語が浮かび上がってくるとは限らないのである。ここはむしろ、ひとまとまりの文字連続が、いかなる語に対応しているのかを、見出し語を手掛かりに正しく、引き当てる。作業が先行し、個々の要素の対応関係はそこから帰納されるというのが順序であらう(その点、先に校本でなされた解説は、やや演繹に過ぎたと言えるかもしれない)。

長崎の市街地は、寛文三年の大火の後、大がかりな都市計画に基づいて再建が進められ、同十二^{一七二七}年の町制改革をもって一段落した。ここに内町二十六町・外町五十四町の計八十町が定まり、以後二、三の町名が変更された他は原則として町制に変動はなく、維

新までこの八十町制が存続することになる（内町は慶長以前からの市街地で外町はそれ以後拡張された街。丸山・寄合の花街二町と出島町を別にして、全町を七十七とすることもある）。

全町の町名は種々の古文獻に容易に見出すことができるが、ほとんどは漢字のみで記されており、その語形を明確に知り得るものはそう多くない。付載の表は、近世から近代にかけてのいくつかの資料から、とりあえず参考となりそうなルビや仮名書きの類を抜き出してみたものである。

なお翁広平は、『吾妻鏡補』巻十三「地理志」においても、同じく本書から長崎の町名を引いている。長崎刊行の「肥州長崎図」から丹念に町名を拾い上げたあと、比較のために本書の町名を例示したもので、町名の漢字表記にはことさしたる異同はないが、音訳漢字による音注は省略されている。また、そちらには末尾に「右花街五條」の文字があり、これは内町・外町・郷下とのバランスから考えても、原文にその種の一文はあったとみてよからう（尤も右に花街五條としているのは原文通りではない疑いがある。地理志の方では、花街の中に「傾城此町見長崎図」として一つ余計なものを翁広平が加えているからである）。

また、本書は全町を内町二十六・外町三十九・郷下十五及び花街四（五）町に区分するが、「郷」（地方）は本来長崎村と浦上村の二ヶ村であり、本書の郷下諸町はみな外町に含まれるはずのものである。さらに、長崎の全町八十町に対して、本書には八十四の町名が見出しにあがっているが、左の四町はいわば余分である。

50 舵工町

57 本（鍛）治屋町（または万屋町）

82 附町

84 半片町

行政区画名の他にも、世間通用の俗称は少なくなかったようで、舵工町や附町などはそういったものの混入かもしれないが、今のところその名を記したものを見ない。本鍛治屋町は延宝六（一七二八）年に改称して萬屋町になっており、ここは新旧の町名が重出している。半片町は花街丸山町内の通りの一つ「片平町」のことらしい（半片の字面は郊外の半片山を思わせるが関係あるまい）。その他に「44 鍛治屋町」も八十町にはない町名だが、これは「出来鍛治屋町」の誤りで、巻十三「地理志」の方では「出来」の文字が冠してある。

三

本書に示された日本語は、たかだか八四項目の固有名詞にすぎないが、それらが当時の長崎方言の発音を写しているとすれば、またそれなりの資料的価値を有するものと言えよう。長崎に来舶中の中国人がごく普通に接し得た日本人といえ、唐通事をはじめとする地役人以下そのほとんどが長崎の地の者であったことを思うと、その可能性は充分にあり、むしろその方が自然である。事実、下に見るように、それらしき二、三の徴証も得られるのである。

一方、音訳漢字が依拠する方言音系については、無論簡単には判断できないが、例えば、最も使用頻度の高い音訳漢字の一つ「市」（禪母。町の「チ」に宛てられる）の場合、現代の中国諸方言音の多くが摩擦音であるのに対して、閩音系の方言音のみが破擦音で発音されるといえるのは示唆的である。さらに「其・起」（止擦牙音字）「加・家」（仮擦牙音字）などが破擦化せずにそれぞれ「キ／カ」に宛てられ、「興・許」などの曉母字が摩擦化せずに「ヒ」に宛てられるといったことも（「ヒ」の音価は別に一考を要するが）、とりあえずは閩方言的と言えそうである。この点をあまり先走りしすぎるの

長崎町名 本東洋客遊略

1 大村町 旺砲喇馬市／翁波喇馬只・おおむらまち

3 船津町 逢納諸馬市・ふなつまち

5 江戸町 移多馬市・えどまち

7 新町 新馬市・しんまち

9 東築町 與加示子其馬市・ひがしつきまち

11 本下町 木獨失達馬市・もとしたまち

13 豊後町 枋高馬市・ぶんごまち

15 金【今】町 意馬馬市・いままち

17 椀島町 膠拔成抹馬市・かばしままち

19 本博多町 木獨百【?】家打馬市・もとはかたまち

21 新興若【善】町 新柯前馬市・しんこうぜんまち

23 本興善町 豊柯前馬市・ほんこうぜんまち

25 金屋町 坎那耶馬市・かなやまち

右 内 一 十 八 條 街

27 東濱之町 與加示花猫(那)馬市・ひがしはまノまち

29 東古川町 與加示胡盧股呱・ひがしふるかわ

31 東上町 與加示島【鳥】哇馬市・ひがしうわまち

33 東中町 與加示那加馬市・ひがしなかまち

35 中紺屋町 那加昆耶馬市・なかこんやまち

37 今紺屋町 意馬昆耶馬市・いまこんやまち

39 今石灰町 意馬膠子耶馬市・() ? () まち

41 新石灰町 新失歸馬市・しんしゅくいまち

2 内中町 撫【無?】之那加馬市・うちなかまち

4 鴻源【島原】町 失馬包喇馬市・しまばらまち

6 小川町 科股呱馬市・こがわまち

8 浦五島町 武喇五島馬市・うらごとうまち

10 西築町 送【逆】示子其馬市・にしつきまち

12 今下町 意馬失搭馬市・いまたまち

14 平戸町 許談徒馬市・ひらどまち

16 外浦町 忽加武喇馬市・ほかうらまち

18 櫻町 殺孤喇招【?】馬市・さくらまち

20 引地町 畜其住馬市・ひきちまち

22 後興若【善】町 高【窩?】失勞柯(前)馬市・うしろこうぜんまち

24 本五島町 豊五島馬市・ほんごとうまち

26 堀町 狐狸馬市・ほりまち

28 西濱之町 送【逆】示花猫那馬市・にしはまのまち

30 西古川町 送【逆】示胡盧(股)呱馬市・にしふるかわまち

32 西上町 送【逆】示島【鳥】哇馬市・にしうわまち

34 西中町 送【逆】示那加馬市・にしなかまち

36 本紺屋町 木獨昆耶馬市・もとこんやまち

38 本古川町 木獨胡盧(股)呱馬市・もとふるかわまち

40 本石灰町 木獨失歸馬市・もとしゅくいまち

42 榎津町 移馬【那?】金然馬市・えのきづまち

43 今燬【鍛】冶屋町 意馬股之耶馬市・いまかぢやまち

45 本籠町 木獨坑柯馬市・もとかごまち

47 本大工町 木獨帝扛馬市・もとだいくまち

49 新大工町 新帝扛馬市・しんだいくまち

51 酒屋町 沙其移馬市・さかやまち

53 桶屋町 倭其耶馬市・おけやまち

55 萬屋町 移牢諸耶馬市・よろづやまち

57 本（鍛）冶屋町 木獨股痴耶馬市・もとかぢやまち

59 諏訪町 思安州【那？】馬市・すわのまち

61 今博多町 意馬多百家【？】馬市・いまはかたまち

63 出島町 帝城麻馬市・でしままち

65 袋町 佛孤盧馬市・ふくろまち

右 外 三 十 九 條 街

66 金【今】魚町 意馬遊河馬市・いまいおまち

68 衣袋【伊勢】町 衣示馬市・いせまち

70 大井手町 倭其【？】蹄馬市・おおいでまち

72 麴【麴】屋町 柯子耶馬市・こうぢやまち

74 今籠町 意馬坑柯馬市・いまかごまち

76 南馬町 眉耶【那】眉休【？】馬市・みなみウマまち

78 上築【筑】後町 坎眉即工柯馬市・かみちくごまち

80 右【古】町 胡盧馬市・ふるまち

右 郷 下 十 五 條 街

81 奇【奇】合町 新州馬市・（？）まち

83 九【丸】山町 麻里野山【？】馬市・まるやままち

44（出来）鐵冶屋町 帝其股之耶馬市・できかぢやまち

46 船大工町 乎尼帝扛馬市・ふなだいくまち

48 出来大工町 帝其帝扛馬市・できだいくまち

50 舵工町 帝扛馬市・（だいく？）まち

52 銀屋町 金移馬市・ぎんやまち

54 油屋町 安飽喇【耶？】馬市・あぶらやまち

56 磨屋町 通其移馬市・とぎやまち

58 大黒町 大哭津【？】馬市・だいくくまち

60 新橋町 新法示馬市・しんぱしまち

62 材木町 材木工馬市・ざいもくまち

64 惠美酒町 烟披詞馬市・えびすまち

67 爐糟町 盧股思馬市・ろかすまち

69 八百屋町 押倭耶馬市・やおやまち

71 本紙屋町 木獨股眉耶馬市・もとかみやまち

73 勝山町 哈之野【馬？】馬市・かつやままち

75 八幡町 押派【呱】打馬市・やわたまち

77 北馬町 越【起】打丕【？】馬市・きたウマまち

79 下築【筑】後町 温【湿】毛即工柯馬市・しもちくごまち

82 附町 三州馬市・（サンジョ？）まち

84 半片町 胶達皮喇馬市・かたびらまち

41	新石灰町	シン	シツクイ	モトシツクイ	SHIKKUI	もとしつくい						
40	本石灰町	モト										
39	今石灰町	イマ										
38	本古川町	モトフル		モトフルカハ	MOTO FURUKAWA							
37	今紺屋町	イマコ										
36	本紺屋町	モトコ										
35	中紺屋町	ナカコ										
34	西中町	ニシナカ	ナカ		KOYA	ひがしなか	東中					
33	東中町	ヒカシナカ			NISINAKA							
32	西上町	ニシウ	ウハ		KOYA		東上					
31	東上町	ヒガシウ			MOTO-KOYA							
30	西古川町	ニシフル	フルカワ	フルカハ	HIGASHI FURUKAWA	ふるかは						
29	東古川町	ヒカシフル			HIGASHI FURUKAWA							
28	西浜町	ニシハマ	ハマノ		HIGASHIHAMA	はしはまの	東はまの	西ハマ	東ハマ	はまの		
27	東浜町	ヒガシハマ			HIGASHIHAMA							
26	堀町	ホリ	ホリ		HORI	ほり						
25	金屋町	カナヤ	カナヤ		KANAYA		金や			かなや		
24	本五島町	ホンゴトウ	ホンゴトウ		HONGOTO	ごとう	本五とう					
23	本興善町	ホンコウゼン	ホンコウゼン		HONKOSHU	ほんこうぜん	本こうぜん					
22	後興善町	ゴコウゼン?	ウシロコウゼン	ウシロコウゼン	USHIKOSHU	うしろこうぜん	新こうぜん					
21	新興善町	シンコウゼン	ヒキチ		KOZEN							
20	引地町	ヒキチ	ヒキチ		HIKICHI							
19	本博多町	モトハカタ	モトハカタ		MOTOHAKATA	もとはかた	本はかた					
18	桜島町	サクラ	サクラ		SAKURA	さくら	かはしま	外ウラ	カバシマ	かはしま		
17	外浦町	ホカムラ	ホカウラ	ホカウラ	KABASHIMA	ほかうら						
16	今浦町	イマ	イマ		IMA							
15	平戸町	ヒラト	ヒラド		HIRADO	ひらど						
14	豊後町	ブンゴ	ブンゴ		BUNGO							
13	今下町	イマシタ	イマシタ		IMASHITA							
12	本下町	モトシタ			MOTOSHITA							
11	西築町	ニシツキ	ツキ		Tsuki	ひがしつき	東つき	西ツキ	東ツキ			
10	東築町	ヒガシツキ										
9	浦五島町	ムラゴトウ	ウラ(ゴタウ)		URAGOTO	ごとう	志ん					
8	新小川町	シノガワ	シノ		SHIN							
7	江戸町	イド	エド		KOGAWA	えど						
6	島原町	シマハラ	シマハラ		FUNATSU	しまばら						
5	船津町	フナツ	フナツ									
4	内中町	ウチナカ	ウチナカ		UCHINAKA							
3	大村町	オオバラ	オオムラ		OKURA	おほむら						
2	長崎古今集覧	校本	長崎市街史	増補長崎略史	人力車賃金表図	長崎名勝図絵	新稿長崎図	享和長崎図	伝寛永図			
1												

は危険だが、その他の音訳漢字の使用状況もこの予見をおおきく裏切るものではない。

さて、右の二点を踏まえたうえで、先の表からある程度窺える町名の語形と、音訳漢字表記とを照らし合わせてみることにしよう。

まず、校本でなされた解説のうち、次のものはそれぞれ下のよう
に改められるだろう（見出しの漢字表記は以下すべて改訂を加えた
形で示す）。

- 8 浦五島町 武喇五島馬市・ムラゴトウ ↓うらごとう
16 外浦町 忽加武喇馬市・ホカムラ ↓ほかうら
22 後興善町 高失勞柯(前)馬市・ゴコウゼン ↓うしろこうぜん
【高↓窩?】
31 東上町 興加示島哇馬市・ヒガシウイ ↓ひがしうわ
32 西上町 送示島哇馬市・ニシウイ ↓にしうわ
40 本石灰町 木獨失歸馬市・モト ↓もとしっくい
41 新石灰町 新失歸馬市・シン ↓しんしっくい
42 榎津町 移馬金然馬市・イマキンゼン ↓えのきづ【馬↓那?】
44 出来鍛冶屋町 帝其胶其之耶馬市・テツカヂヤ ↓できかぢや
59 諏訪町 思安州馬市・スワス ↓すわの【州↓那】
以下は単なる誤植であろうか。
4 島原町 失馬包喇馬市・シマハラ ↓しまばら
29 東古川 興加示胡盧胶呱・ヒカシフルカワ ↓ひがしふるかわ
33 東中町 興加示那加馬市・ヒカシナカ ↓ひがしなか
52 銀屋町 金移馬市・キンヤ ↓ぎんや
58 大黒町 大哭津馬市・タイコク ↓だいきく【津↓?】
84 半片町 胶達皮喇馬市・カタヒラ ↓かたびら

その他、以下のような音注にも、種々問題がありそうである。

1 大村町 旺咆喇馬市／翁波喇馬只・おむらまち

ここにだけ音注が二つあるが、その第二字目はともに両唇破裂音字（並母・幫母）であり、「咆」字は「54 油屋町 安咆喇馬市」のようにも用いられている。従って、ここは校本のように「オオブラ」と解すべきかもしれないが（「波」を「バ」とするのはあたるまい）そのような語形をまだ確認していない。なお、町を「馬只」と表記するのはここに見える一例だけである（校本は只が兄に誤植されている）。

2 内中町 撫之那加馬市・うちなかまち

「撫」字（敷母）は、多くの現代方言音で唇齒摩擦音、閩方言では喉頭摩擦か軟口蓋摩擦音で、いずれにせよ「ウ」には適さない。ここは「無」（微母）であろうか。

3 船津町 逢納諸馬市・ふなつまち

校本はこれを「フナヅ」と読むが、「諸」字（章母）は閩方言をはじめ現代諸方言で無声音、またこの町名の第三音節を積極的に濁音と認めるべき資料も見出していない。ここは「ふなつ」であろう。

5 江戸町 移多馬市・えどまち

校本はこれを「イド」と読む。「移」字（支韻）は、確かに「イ」に相応しい音訳漢字と言えるかもしれない。ただ、「いどまち」といった語形が確認されない限りは、これを先ず「エ」と認め、しかるのちに（現代肥前方言がそうであるように）その口蓋性をここに読み取るべきであろう。なお、現代福州方言（閩音系）では「移」字は「ie」である。

18 櫻町 殺孤喇招馬市・さくらまち

始めの三字で「さくら」と読めそうであり、「招」字が何のためにここにあるのかよくわからない。

19 本博多町 木獨百家打馬市・もとはかたまち

61 今博多町 意馬多百家馬市・いまはかたまち

「百」字（幫母）は諸方言を通じて両唇破裂音であり、ハには適さない。61番は、かりに「百家多」の順が本来のものだとすると、さらに「多」字（歌韻）をタに宛てるのも不適當であると言わねばならない（これは江戸町の音注に「移馬市」とある方が自然である）。見出しの「博多」に引かれたのかもしれないが、ともかく不審の多い音注である。

39 今石灰町 意馬餃子耶馬市・（？）

見出しからすれば「いましつくいまち」のはずであるが、音注はそう読めない。他の例から推せば「いまかじや」あるいは「いまかつや」などと読めそうだが、「今鍛冶屋町」は43番に見えており、この音注が何を示そうとしたのか不明である。

46 船大工町 平尼帝扛馬市・ふなだいくまち

「尼」字（脂韻）をナとするのは苦しく、「校本」のように「フネダイクマチ」と解すべきかもしれないが、まだそういう語形を見出していない。

48 出来大工町 帝其帝扛馬市・できだいくまち

「帝」字（霽韻）が同じ音注のなかでデニの二つに対応しているが、これはどう解すべきであろうか。この字は、他に、44 出来鍛冶屋町・63 出島町でデに、46 47 48 49（50）の各大工町でニにそれぞれあたっている。原音からすればデの方が自然であり、右の「大工」は（少なくとも音声的には）デークに近いものだったのかもしれない。なお、本山桂川氏『長崎方言集』（昭和六年）には、

「デーク」の語も一応見えている。

51 酒屋町 沙其移馬市・さかや

53 桶屋町 倭其耶馬市・おけや

56 磨屋町 通其移馬市・とぎや

70 大井出町 倭其蹄馬市・おおいで

「其」字（群母・之韻）は、キに宛てた例が最も多いが、右のように、なかなか多様な用い方がされている。尤も、酒屋町でこれをカと解するのは無理が大きい。校本のように「サキヤ」とするのもよいが、ここはむしろ桶屋町ともどもケと認めたうえで、今日の肥前方言が多少なりともそうであるように、その口蓋性をここに読みとるべきかもしれない。いずれにせよ、「さきや町」なり「さけや町」の語形を確認しなければならぬ。大井出町の例は、何らかの誤記を想定した方がよからうか。

63 出島町 帝城麻馬市・でしままち

この町名には古来「でじま」「でしま」の両形が存する。仮名書きの資料に濁点を付したものが目につく一方で、オランダ商館関係の書類では Decima あるいは Desima と綴られるのが一般的であり、D・クルチウスの『日本語文典例証』（一八五五年成）には、

「Desima」
トシマ」とある（濁点を欠く仮名書き例も少なくないが、概して積極的な資料とはならない。なお、クルチウスの『例証』は多数の長崎方言を含むものである）。『長崎市史』地誌篇の出島の項に「出島と呼ぶのが現今では一般普通である。長崎市民はデジマと発音して居る者が多い。」とあるが、おそらくあとのデジマはデシマの誤植であろう。実際長崎では「デシマ」も聞かれるのである。

「城」字（禪母）は現代閩方言で無声の摩擦音、同音の「成」字が「椀島町」に用いられている。ここは一応「でしま」と解しておく。

66 今魚町 意馬遊河馬市・いまいおまち

校本は「イマユオマチ」とするが、その語形をまだ諸資料に見いだしていない。「遊」字（尤韻）は確かにウに宛てるには適当な字とは言えない。ただ、長崎古地図に「いを町」、慶長吉利支丹行列

記に *luo-machi* とあり、現代でも「イランマチ 魚町。現魚町」(本山桂川前掲書)とあるところからすると、ここは「いおまち」(「オ／＼」の音韻的対立なし)の語を引き当てるのが妥当かもしれない(長崎では「魚」は古今を通じて「イオ」である)。

「遊」字は、現代閩方言で「*mei*」⁷⁶、「*mei*」⁷⁷、『*鹿幼略記*』の近世福州音の仮名書きで「イウ」。現代肥前方言からも予想されるように、近世長崎方言の「オ」は、語中語尾、殊に狭母音の後において唇音性を帯びていたと考えられ、この音注は、その唇音的要素の標示が、前接の音訳漢字においてなされたものと解せようか。

68 伊勢町 衣示馬市・いせまち

校本はこれを「イシ」と読む。「示」字(至韻)は、確かに「シ」に相応しい音訳漢字であり、事実その用例も一〇例を越す。しかし、「いしまち」といった語形が確認されない限りは、これを先ず「セ」と認め、(現代肥前方言がそうであるように)その口蓋性をここに読み取るべきであろう。

73 勝山町 哈之野(馬)馬市・かつや(ま)まち

このままでは「かつやままち」とは読めないもので、仮に「馬」字をもう一つ補ってみたが、『*江漢西遊日記*』に「亦勝屋町におらんだ船の図、唐人屋しきのづなど売る者、之も二人扶持を取と云」とあって、これは勝山町の豊島屋(長崎版面の版元)をさして言ったものとされる。江漢の記憶違いでなければ、同町には「かつやまち」なる俗称もあったことになり、音注はこのままで良いのかも知れない。なお、「哈」字(匣母)は現代諸方言で喉頭あるいは軟口蓋の摩擦音であるが、閩方言(廈門)においてk音が存する。

75 八幡町 押派打馬市・やわたまち 【派↓呱】

「校本」は「ヤハタ」とするが、「派」字(滂母)を「ハ」とするのはやや苦しい。ここは「やわた」の語形を写したものと見て「呱」

に改めた。この字は広韻で古胡切、本書で「ク」に宛てられる「孤」字と同音だが、ここは集韻に烏瓜切として見えるそれであろうか。

「6小川町」 「29東古川」等に「呱」字の用例がある。

76 南馬町 眉耶眉休馬市・みなみウマまち 【耶↓那、休↓?】

77 北馬町 起打丕馬市・きたウマまち 【丕↓?】

「休」「丕」はともに「うま」にあたる部分であるが、よく読めない。「抹」字(17柁島町)に用例がある(あたりの誤記だとすると、「マ」の如き音声を写したことになるか(クルチウス前掲書には「ムマ m'ma. 馬」とある)。

81 寄合町 新州馬市・(?)

「よりあいまち」とあるべきところであるが、この音注が何を示そうとしたものか不明。八幡町の古称「しんちう町」あたりが音注には合いそうだが、関係はなからう(場所も離れ過ぎている)。唐人荷物蔵のある新地(しんち)は場所が近いが、これもまたあまり関係はなさそうに思う。花街のことゆえ俗称も多かったであろう。なおよく考えたい。

82 附町 三州馬市・(?)

これも花街ということになっているが、よくわからない。元禄二年の唐人屋敷設置以前には来航唐人の宿泊に関する「附町」(つきぞう)なる制度があったが、音注にも合わず、この混入ではあるまい。寄合町の上手を俗に「サンジョ町」と言ったというから、音注は(やや苦しいが)それに該当するのかもしれない。

以上、従来の研究を踏まえながら、解読の方法論とその資料的性質についていささかの卑見を述べた。この他にも問題とすべき箇所は少なくないが、すべて後考に俟つことにする。最後に、音注を通して観察される二、三の音声的なことがらに触れて、稿を終えることにする。先ず、ハ行音については、

ハ 花(東・西濱之町) 《仮合二平麻暎》
 興(東ノ町) 《會開三平蒸暎》
 エ 許(平戸町) 《遇合三上語暎》
 畜(引地町) 《通合三入屋暎》
 フ 胡(古川・古町) 《遇合一平模匣》
 佛(袋町) 《臻合三入物奉》
 平(船大工町) 《遇合一平模匣》
 逢(船津町) 《通合三平鐘奉》
 ホ 忽(外浦町) 《臻合一入没暎》
 狐(掘町) 《遇合一平模匣》
 豊(本ノ町) 《通合三平東敷》

ハ 移(江戸・榎津町) 《止開三平支以》
 烟(恵美酒町) 《山開四平先影》
 ケ 其(桶屋町) 《止開三平之群》
 セ 示(伊勢町) 《止開三去至船》
 カ 前(新・本興善町) 《山開四平先從》

とあって、いずれも前舌狭母音を含む漢字で記され、また概ねイ列の音訳漢字とも相通じるところから、その口蓋性が類える。

ガ行音については、それに前接する音訳漢字が、

ガ 科肢呱(小川町) 《果撰》×
 興加示(東ノ町) 《會撰》
 ギ 通其移(磨屋町) 《通撰》
 ゴ 坑柯(本・今籠町) 《梗撰》
 即工柯(上・下筑後町) 《通撰》
 枋高(豊後町) 《宕撰》
 武喇五島(浦五島) 《山撰・入》×
 豊五島(本五島) 《通撰》

のような用例がみられるが、喉音系の字が多数を占め、軽唇音字が少ないのは、中世の中国資料と趣を異にするところである。

ただ、閩音系の方言音にf音が無いこと(明末にはすでに失われていたという)を思えば、簡単にこれを唇音退化と結びつけるわけには行かない。ハノホには合口の字を宛てるなど、唇音性は類い得ると言える。有坂秀世氏は、当時の長崎方言のハの子音について、岡島冠山の唐音表記を主な資料としながら、

思ふに、長崎あたりでは、ハの頭音は第十八世紀頃までも未だ唇音だったので、長崎人にとっては、支那語の fa, ha は容易に彼等自身のハと同一視され得たのではなからうか。

と述べておられるが、また、D・クルチウス前掲書(一八五五)にも次のような興味深い記述が見える。

のように、ほとんどがリ韻尾の字であるのが注意をひく。これは、いわゆる *initial glide* の鼻音を写したものととも思われるが、

日本人と交際した欧州人は最初から一様に、fと書いてhとは書かなかつた。すなわち、ホルトガルの宣教師達や同時代のおが和蘭の人、カロソ(FR. CARON, 1639)、その後のケンペル(E. KEMPER, 1691)、ツェンペリ(P. THUNBERG, 1775)、チチンツグ(J.

撫之那加(内中・うちなか)
 興加示子其(東築・ひがしつぎ)
 興加示子其(東築・ひがしつぎ)
 通其移(磨屋・とみや)

柯子耶(麴屋・こうじや)

木獨坑柯(本籠・もとかこ)

のように、本書ではカ行・ガ行を字母そのものでは書き分けておらず、このり韻尾字の上接はむしろ濁音標示そのものに主たる目的があったのかもしれない(とところで、原音にはg音がなかつたのであろうか。例えば福州方言では明末以来群母は見母に合流し、/g/の音素を持っていないのだが)。(八)

注

(一) 刊行はされなかつたらしく、写本によって伝えられた。現在北京図書館に一本が蔵されるほか、日本では静嘉堂文庫と駒沢大学図書館所蔵の二本が知られている。北京図書館本と駒沢大学図書館本は二十八巻、静嘉堂文庫本は三十巻と、その構成をやや異にしている。本稿は静嘉堂文庫本の写真版をテキストとし、左記の書を参照した。

(1) 『纂輯日本訳語』(京都大学国語学国文学研究室編、昭和翌年)
(2) 『吾妻鏡補所載海外奇談国語解 本文と索引』

(大友信一・木村 晟編、昭和翌年)

(二) 渡辺 三男「吾妻鏡補所引の日本語彙」

(「駒沢大学研究紀要」二〇号 昭和三七年)

同 「吾妻鏡補の日本語資料」

(「岩井博士古稀記念典籍論集」昭和三六年)

平 弥悠紀「清代の中国資料による日本語の音声

母音「オ」について

(「女子大國文」九五号 昭和五年)

同 「日本語に於ける有気音と無気音

——室町時代以後の中国資料による

(「国語学会昭和六年春期大会要旨」)

(三) 注(二)の文献(2)に付載されている。

(四) 『長崎古今集覽』(松浦東溪撰、文化八年)

『長崎市史・地誌編』第一章「長崎市街史」(昭和三年)

『増補長崎略史』第十巻「市街郷村史」(大正五年)

『長崎市人力車賞金表図』(明治三年。長崎県立図書館蔵)

『長崎名勝図絵』(饒田諭義・野口文龍等編述、文政頃成)

『新稿長崎図』(享和元年、梅香堂板。長崎県立図書館蔵)

『享和長崎図』(大和屋板。長崎県立図書館蔵)

『伝寛永図』(九州大学九州文化史研究施設蔵)

(五) 長崎町名の俗称については、左記の文献を多く参照した。

渡辺庫輔「内町外町」(『崎陽論攷』昭和元年、所収)

津田繁二「長崎の町名」(『長崎談叢』三、昭和八年)

同 「再び長崎の町名考」(『長崎談叢』三、昭和八年)

(六) 現代中国諸方言音については、主に左記の二書に拠った。

『漢語方音字匯』(北京大学語言学教研室編)

高本漢『中国音韻学研究』(台湾商務印書館発行)

(七) 『唐話辞書類集』第一六集所収

(八) 邵榮芬「明代末年福州話の声母系統」(『慶祝呂叔湘先生

從事語言教学与研究六十年論文集』一九五五年)

(九) 「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」

(「国語音韻史の研究」所収)

島根大学講師